

平成19年度 大学院工芸科学研究科博士後期課程 学位記授与式
学長告辞

本日、博士の学位を取得されました皆さん、まことにめでとうございます。京都工芸繊維大学を代表して心から祝意を表します。また、長い間にわたって皆さんの研究を支えてこられたご家族および関係者の方々に対して深い敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に大学院の組織を改組し、工芸科学研究科を設置いたしました。そして、今までに、638名の博士号取得者を輩出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。

本日、皆さんには、それぞれ課程博士第480号から508号まで、また、論文博士第160号から163号までの学位を授与させていただきましたが、皆さんの研究業績は本学の知的財産とさせていただくことになります。提出していただきました学位論文や報告書は、広く人々に公開されることになり、皆さんの後輩である学生の研究のために、また、それぞれの学問分野の新たな展開のために、さらに、技術革新や産業創生の新たな素材として利用されることになります。

皆さんは、輝かしい成果を挙げ、本日目出度く博士の学位を取得されました。明日からは、新しい環境で、それぞれの将来計画の実現に向け、勇往邁進されることと思います。その際、本学で研鑽された研究成果を十分に生かし、人生の新たな段階を切り開くよう一層奮励努力されることを祈って止みません。

皆さんの新しい旅立ちにあたって、これからの仕事を進めていく上で大切なことについて一言、話させていただきます。

日本では、従来までは、終身雇用、国民皆保険、若年労働者層による高齢者に対する年金負担といったシステムを工夫して、資本主義社会のもつ厳しさを緩和して参りました。しかし、グローバル化の波は、このような日本独自のシステムの維持を困難にしております。これが、近年、日本の社会で生きる人々に厳しさを実感させることになっており、自殺者の増加や職場での鬱病罹患者の増加、過労者の増加といった現象が起こっています。

このような厳しい社会環境の中で、自らの能力を十全に発揮していくためには何が必要でしょうか？

その一つは、仕事に当たって、高い達成動機をもつことであります。

達成動機とは個人が物事を達成し成功することへの鍵となる資質とされます。資質というと、何か生まれながらにもつ才能と考えがちですが、達成動機は社会的動機であり、訓練によって獲得され、また、変えることができるものです。

アメリカでは、Underachiever と呼ばれる、潜在能力が高いにもかかわらず学業成績が低い生徒達に対して、達成動機づけ訓練（AMTP Achievement Motivation Training Program）を行い、実績を上げています。これらの訓練では、達成動機的人間の行動パターンの習得が目的とされています。

まず、ここで訓練習得される達成動機的人間の行動パターンについて説明いたします。

達成動機の強い人とそうでない人では、仕事の目標の設定の仕方が異なるのです。人間がある目標を遂行しようと行動するとき、常に2つの相反する動機づけが働きます。一つは、成功を期待する気持ちで、目標接近、即ち、目標達成への欲求へと動機づけられます。もう一つは、失敗を恐れる気持ちで、失敗回避、即ち、失敗を避けるための行動のみをしようとする欲求へと動機づけられます。この2つの相反する動機づけは常に共存しているのですが、どちらの動機づけが強いかは、人によって異なります。成功を期待する気持ちが強い人が達成動機が強い人であり、失敗回避が強い人が達成動機の弱い人です。

成功する確率が異なる課題が与えられたときに、どのような課題を選択するかを調べてみると、達成動機と強い人とそうでない人では、課題の選択の仕方、すなわち目標設定の仕方が異なることがわかります。

達成動機が強い人は、成功への確率が異なる課題を与えられると、成功への主観的確率が0.5という困難さが中間の課題を選択します。例えば、輪投げをするとき、好きな位置から投げてよいという実験をしますと、成功率がほぼ0.5と判断された投擲距離を選択する人が最も多いのです。

これに対して、達成動機が低い人は、成功への確率が異なる課題を与えられると、基本的にはどの課題に対しても失敗回避に動機づけられます。すなわち、すべての課題を避けたいと思うのです。とくに、競争的達成状況はそのような人々にとっては、不安を喚起するものとなります。社会的圧力等によってどうしても行動しなければならない時に、そのような人は、成功の確率が0.5と判断される困難さが中間の課題は、失敗に対する不安が最大となり、最も避けたい課題となるのです。

従って、最も易しく失敗の恐れがない程容易な課題か、最も難しく出来なくても当然と思われるような困難な課題を選択します。輪投げの目標設定実験では、中間困難の距離からの投擲は少なくなり、誰でも出来る至近距離か途方もなく遠い距離からの投擲を選択するのです。

このような、目標設定の行動の違いは、その人の達成行動に大きな影響を及ぼします。

達成動機の強い人は、遠い目標に向かって、その時の自分の能力を適切に判断し、0.5の成功と主観的に判断される当面の目標設定をし、その目標の達成に強く動機づけられます。そして、その目標の遂行に成功することによって、より達成動機づけが強まります。その上で、つぎのチャンスには、より高い目標を設定して、チャレンジするのです。これによって、最終的には、遠い目標を達成できると考えるのです。また、このような人々は、競争的達成状況を、むしろ、飛躍の契機と肯定的に考えることによって、困難を克服できると考えるのです。日々の仕事の中で、目標設定を適切に行うことは、個人の達成動機を高めることにもなるのです。

達成動機の強い人の他の特徴として、成功や失敗の原因の認識の仕方に関係することがあります。課題を遂行すれば、成功することもあれば失敗することもあります。そのとき、成功や失敗の原因として4つの要因があり、成功や失敗に遭遇したときに、人は4つの要因のいずれかに原因帰属します。それらは、能力、努力、困難さ、そして運のうちのいずれかです。この原因の帰属にあたって、達成動機づけの強い人は、自分の行動結果に対して、能力と努力に、とくに、努力に成功や失敗の原因を帰属させる傾向が強いのです。そして、努力が成功や失敗の重要な決定因であると判断されるような課題に対しては進んでそれを選択する傾向が見られます。

達成動機づけの強い人は、達成結果に対して努力要因へ原因帰属するという特徴によって、失敗に直面しても耐える傾向が強くなると考えられるのです。

能力は、生まれつきの生得的要素を含むもので変化しにくい個人の属性と考えられますが、努力は生得的要素ではなく変動可能な性質のものです。失敗しても、次のチャンスにはもっと努力して、課題を達成できるかもしれないと期待をもち、そのような課題に挑戦して、達成したいという欲求が高まるのです。達成動機づけは努力を支える力となるのです。

皆さんは、明日からまた新たな挑戦をはじめられることになりましたが、達成動機的人間の行動パターンを涵養して、高い目標の達成を目指して粘り強く努力され、輝かしい成果を挙げられることを期待します。皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞といたします。

本日は、学位の取得、まことにおめでとうございます。

平成20年3月25日
京都工芸繊維大学長
江島義道